上越教育大学研究紀要　第33巻　平成26年３月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 33, Mar. 2014

社会的スキルの違いがネットワーク上の他者との関わり方に及ぼす影響

石　川　　真*

（平成25年９月30日受付；平成25年10月30日受理）

要　　旨

本研究は，ネットワーク上のコミュニケーションの主流であるメールおよびSNS（Social Networking Service）のコミュニティに属する他者との関わり方について，社会的スキルの違いに着目し，その傾向を探ることを目的とした。社会的スキルは下位概念として６因子が抽出され，個々に他者との関わりについて分析した。

メールでは，コミュニケーションスキルの高い者の方が低い者よりも他者との良好な相互作用の関わり方をしている傾向が明らかとなった。一方，トラブル回避スキルの低い者は高い者よりも依存的な関わり方をする傾向が強いことが示された。SNSのコミュニティに属する他者との関わり方については，社会的スキルが低いほど依存的な傾向が強いことが示された。一方，コミュニケーションスキルの高い者は，低い者よりも積極的な関わり方をしている傾向が示された。以上の結果を踏まえ，社会的スキルの違いが他者との関わり方に影響を及ぼすことを知ることが，情報モラル教育の指導の在り方に有用であることを考察した。

KEY WORDS
社会的スキル　social skill　　関わり　relationship　　ソーシャルネットワーク　social network
コミュニケーション　communication　　情報モラル教育　information moral education

1　はじめに

2008年３月に小・中学校の学習指導要領（2009年３月に高等学校の学習指導要領）が改訂され，情報教育の充実が重要事項として挙げられている。とりわけ，各教科等の指導を通じて，情報モラルを身につけさせる点が明示されており，教員は情報モラルなどを指導する能力が求められている。しかし，文部科学省（2013）においては，教員のICT活用指導力の中で，情報モラルなどを指導する能力が他の４つの能力（教材研究・指導の準備・評価などにICTを活用する能力，授業中にICTを活用して指導する能力，児童・生徒のICT活用を指導する能力，校務にICTを活用する能力）よりも低い傾向であることが明らかとされている。こうした現状の問題解決に向け，さまざまな取り組みがなされている。たとえば，情報モラル教育指導の支援のさきがけとして，2007年３月に社団法人日本教育工学振興会が公開した「情報モラル指導実践キックオフガイド」には，情報モラル指導のためのモデルカリキュラムや実践事例集，実践の観点や進め方の解説などのコンテンツがまとめられている。2011年３月には，文部科学省国立教育政策研究所が情報モラル教育を無理なく確実に進めていけるように，「情報モラル教育実践ガイダンス」を作成・配布している。また，学習指導要領に対応した「教育の情報化に関する手引き」（文部科学省，2010）においても，情報モラル教育の指導を推進するための内容が盛り込まれている。

ところで，総務省（2013a）によると，主な情報通信機器によるコミュニケーション手段については，調査対象の全ての年代（10～60歳代）でメール・SMSの利用率が最も高い。さらに，10～20歳代に焦点を当てると，携帯電話の通話利用よりもSNS（Social Networking Service）の利用率の方が高く，利用時間においてもメール・SMSが最も長く，続いてSNSの利用が長い傾向が示されている。こうした若年層の利用状況を踏まえると，ネットワーク上（以下，ネット上と呼ぶ）のコミュニケーション行動や振る舞いを明らかにしていくことが情報モラル教育の指導に有用といえる。たとえば，ネット上でのフレーミング・炎上（flaming）というトラブルは，対面コミュニケーションと比べて匿名性が高く，相手の非言語的な情報が欠如することによりことにより生じやすい問題として指摘されている（Sproull and Kiesler, 1991）。一方で，匿名性が高いことにより没個性化され，集団の規範や基準に沿った振る舞いがなされ，その結果としてフレーミング・炎上が起ると解釈するSIDE（Social Identity model of De-individuation Effects）モデルも提唱されている（Reicher, Spears and Postmes, 1995）。トラブルの原因に対する理論やモデルが複

*学校教育学系

数あるのであれば，それらに対応した指導の在り方を検討していく必要があると考えられる。

こうした中にあって，石川（2013）は他者との円滑な相互作用に求められる社会的スキルに着目し，メール利用時の振る舞いの傾向を探っている。その結果，社会的スキルの違いによって，メール利用時の振る舞いに異なる傾向があることを明らかとした。その上で，社会的スキルの高い者の振る舞いを望ましいモデルの１つと捉えると，社会的スキルの低い者が振る舞うべきメールの表現や内容に対して重視する姿勢は改善の余地があることを指摘している。総務省（2013b）の通信利用動向調査によると，個人におけるSNSへの参加について，全ての年代において前年度よりも利用率が上がっている。今後，ますます利用が増加していくであろうSNSや，日常的に利用されているメールでの振る舞い傾向についてさらに明らかにしていく必要があるだろう。

そこで，本研究では社会的スキルの違いがネット上のコミュニケーション行動や振る舞いにどのような影響を及ぼすか，とりわけ，メールおよびSNS上での他者との関わり方の傾向について明らかとすることを目的とする。さらに，情報モラル教育の指導からみた本研究で得られた知見の有用性について考察する。

2　方法

2.1　対象者・実施時期と方法

情報教育関連の講義科目の受講者である学部生，大学院生175名（男86名，女88名，不明１名／18～39歳）を対象とし，質問紙調査を授業時間内に実施した。なお，個人情報として性別および年齢のみ回答を求めたが，同意が得られなければ無回答であっても構わないこと，および，記入された回答は統計処理を行い，回答用紙は適切に管理・処理する旨を口頭で伝えた。

2.2　質問紙

質問紙は以下の５つの内容で構成した。

⑴　社会的スキル測定の尺度（菊池，1988，項目内容については表１参照）
⑵　メール利用時における相手との関わり方（13項目，項目内容については表３参照）
⑶　自らが発信するSNSの特徴の認知および利用状況（９項目）
⑷　⑶で挙げたSNS利用時における他者との関わり方（15項目，項目内容については表５参照）
⑸　⑶で挙げたSNS利用時における他者との関わりにおいて重要な点（自由記述）の回答を求めた。

今回はこのうち，⑴社会的スキル（18項目），⑵メール利用時における相手との関わり方（15項目），⑷⑶で挙げたSNS利用時における他者との関わり方（15項目）を分析対象とした。これら⑴⑵⑷はいずれも５件法により回答を求めた。

3　結果および考察

3.1　社会的スキルの特徴

社会的スキルの全18項目について合計点（この指標を全SSと呼ぶこととする）を求めた結果，平均値は57.35，標準偏差は10.17であった。また，信頼性係数（クロンバックのα係数）はα＝.88だった。社会的スキルの下位概念を明らかとするために，18項目による因子分析（最尤法，平行分析の結果に基づき６因子を抽出，バリマックス回転，因子得点の推定）を行った結果，第Ⅵ因子までの累積寄与率は51.60％だった（表１）。各因子の負荷量が高い項目内容を参考とし，第Ⅰ因子は対人関係スキル，第Ⅱ因子はコミュニケーションスキル，第Ⅲ因子はトラブル回避スキル，第Ⅳ因子は問題対処スキル，第Ⅴ因子はマネージメントスキル，第Ⅵ因子は対人配慮スキルと命名した。従来の研究では，たとえば菊池（1993）が「問題解決力」「トラブルの処理」「コミュニケーション能力」の３因子を抽出，石川（2012）が「問題処理スキル」「問題解決・意思決定スキル」「コミュニケーションスキル」「対人関係スキルスキル」「批判的スキル」の５因子を抽出している。今回は，因子数が従来の研究と比べると多く抽出されたものの，同種の主要な因子が抽出されたと考えられる。

本研究の分析にあたっては，これらの社会的スキル（全SSおよび下位概念の６因子）のレベルの違いを比較検討の基準とした。メールやSNS利用時の他者との関わり方の傾向を明らかとするために，これらの社会的スキルを次の手順で上位群と下位群に分類した。全SS，下位概念としての第Ⅰ～Ⅵ因子それぞれについて，各平均以上を上位群

（社会的スキルのレベルが高い者），平均未満を下位群（社会的スキルのレベルが低い者）とした（表２参照）。さらに，全SSと各因子の社会的スキルレベルの一致度をκ係数により求めた（表２）。κ係数はいずれの因子においても，高い値ではなかった。これは，社会的スキル全体（全SS）による群分けと下位概念の６タイプの群との間にズレがあることを意味している。したがって，社会的スキル全体として高い者であっても，下位概念の６タイプのスキルがいずれも一律に高い傾向であるわけではないことが示された。

表１　社会的スキルの因子構造

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	共通性
4 相手が怒っているときに，うまくなだめることができますか	.67	.17	.40	.03	.14	.09	.67
3 他人を助けることを，上手にできますか	.66	.20	.08	.20	.24	.09	.59
2 他人にやってもらいたいことを，うまく指示することができますか	.55	.27	−.09	.30	.03	.33	.58
1 他人と話していて，あまり会話が途切れない方ですか	.47	.32	.08	.22	.08	.06	.39
8 気まずいことがあった相手と，上手に和解できますか	.41	.14	.35	.18	.01	.26	.41
12 仕事の上で，どこに問題があるのかすぐにみつけることができますか	.40	.04	.19	.46	.11	.04	.42
15 初対面の人に，自己紹介が上手にできますか	.11	.67	.13	.25	.19	.05	.58
5 知らない人でも，すぐに会話が始められますか	.15	.65	.19	.04	.00	.09	.49
10 他人が話しているところに，気軽に参加できますか	.32	.49	.05	.11	.09	.44	.55
13 自分の感情や気持ちを，素直に表現できますか	.29	.47	.14	.01	.18	.08	.36
7 怖さや恐ろしさを感じたときに，それをうまく処理できますか	.08	.26	.63	.22	.11	.17	.57
6 まわりの人たちとの間でトラブルが起きても，それを上手に処理できますか	.42	.15	.53	.21	.09	.19	.57
9 仕事をするときに，何をどうやったらよいか決められますか	.17	.09	.12	.72	−.06	.10	.58
14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても，うまく処理できますか	.18	.23	.33	.38	.09	.17	.38
18 仕事の目標を立てるのに，あまり困難を感じない方ですか	.07	.14	.28	.35	.27	−.07	.31
17 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても，うまくやっていけますか	.10	.03	−.01	.10	.76	.32	.69
16 何か失敗したときに，すぐに謝ることができますか	.18	.22	.17	−.05	.66	−.09	.56
11 相手から非難されたときにも，それをうまく片付けることができますか	.15	.12	.27	.06	.12	.68	.59
寄与率（%）	12.62	10.18	7.76	7.74	7.25	6.06	

表２　社会的スキルの上位群・下位群の各人数およびその傾向

	全SS	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
上位群	86	87	87	100	93	81	86
下位群	87	86	86	73	80	92	87
κ係数	−	.46	.49	.38	.37	.26	.17

3.2　社会的スキルの違いがメール利用時における他者との関わり方に及ぼす影響

メールでの他者との関わり方の13項目について，因子分析（最尤法，平行分析の結果に基づき４因子を抽出，バリマックス回転，因子得点の推定）を行った。その結果，第４因子までの累積寄与率は57.09％だった（表３）。各因子の負荷量が高い項目内容を踏まえ，第１因子は快適性，第２因子は依存的関係性，第３因子は相互作用性，第４因子は表現・判断力量不足と命名した。第１因子として抽出された快適性は，直接的な他者との関わり方ではなく，他者との関わりに伴う良好な感情的側面の因子と考えられる。

社会的スキルの18項目について合計点（全SS）を独立変数，メールでの他者との関わり方の４因子（因子得点）を従属変数として，因子ごとに回帰分析を行った。その結果，相互作用性の関わり方を従属変数（y_3）としたケースにおいて有意であった（$y_3=.02x-1.0$／$F(1,160)=9.41$，$p<.01$／自由度調整済み決定係数＝.05）。正の係数であることから，社会的スキルが高いと相互作用性も高い関連性があることを示唆しているが，決定係数が低かった。

社会的スキルの６因子（因子得点）を独立変数，メールでの他者との関わり方の４因子（因子得点）を従属変数として変数増減法による重回帰分析を従属変数ごとに行った。その結果，依存的関係性，相互作用性の因子を従属変数とした場合において有意となるモデルを抽出した（表４参照）。依存的関係性においては，トラブル回避スキルが負の係数で有意な傾向を示した。コミュニケーションスキル，マネージメントスキル，対人配慮スキルは有意傾向であ

り，このうち，対人配慮スキルが負の係数であった。すなわち，依存的関係性因子はトラブル回避スキルや対人配慮スキルが高い者ほど依存的な関わり方が弱く，それらのスキルが低い者ほど依存的な関わりが強い傾向があることを意味している。何らかの問題が生じたり，自分で解決できないようなコミュニケーション場面に遭遇した際に，関連するスキルの高い者は，自分自身で対処することにより，依存的な関わり方がそれほど強く表れない一方で，自分自身でうまく対処できないスキルの低い者は，依存的な関わり方が強いという現象を表しているのではないかと考えられる。相互作用性においては，コミュニケーションスキルが正の係数で有意傾向を示した。対人関係スキル，問題対処スキルは正の係数であるが，有意ではなかった。コミュニケーションスキルが高いほど相互作用性も高く，コミュニケーションスキルが低ければ相互作用も低い傾向が示された。

しかし，これらの関連性や傾向を説明するためには決定係数（および自由度調整済み決定係数）がいずれも低かった。そこで，全SS，6因子ごとに分類した上位群，下位群の平均値の差の検定をメール利用時の4タイプの関わり方ごとに行った。あらかじめ等分散性の検定（F検定）により，帰無仮説が棄却されたものについては，ウェルチの法（Welch's test）を採用し，それ以外はt検定を行った。分析の結果，依存的関係性については，マネージメントスキル（Ⅴ）（$t(166)=2.59$，$p<.05$），対人配慮スキル（Ⅵ）（$t(166)=2.74$，$p<.01$）の社会的スキルの2つの下位概念において，下位群の方が上位群よりも有意に関わり方が強いことを示した（図1(a)）。重回帰分析の結果とは異なるタイプの社会的スキルが影響を及ぼしているが，関連するスキルの低い者は，依存的な関わりが強い一方で，スキルの高い者は低い者ほど依存的な関わりがない，もしくは依存的な関わりは強くないという傾向を示した。一方，相互作用性は，社会的スキル全体（$t(166)=3.29$，$p<.01$），対人関係スキル（Ⅰ）（$t(166)=3.00$，$p<.01$），コミュニケーションスキル（Ⅱ）（$t(166)=2.28$，$p<.05$）において上位群の方が下位群よりも有意に高かった（図1(b)）。相互作用性についても，重回帰分析の結果と同様の傾向を示していることが確認された。

表3　メール利用時の他者との関わり方の因子構造

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
4 メールのやり取りは多い方が良い	.76	.23	.33	.10	.74
5 メールのやり取りは心地良い	.71	.43	.25	.05	.76
1 メールのやり取りをすることで安心する	.63	.37	.13	−.01	.55
3 メッセージを送ったら，すぐに返信が欲しい	.59	.24	.38	.12	.56
13 メールのやり取りに夢中になっている	.57	.48	.26	.20	.66
10 自分のメッセージに共感してほしい	.30	.65	.17	.00	.54
12 相手からメッセージが届かないと不安になる	.39	.54	.12	.02	.46
9 相手のメッセージは繰り返し読む	.17	.54	.06	.18	.36
6 相手からメッセージが届いたら，すぐに返信する	.31	.00	.69	.11	.58
8 メールのやり取りはお互いにとって大切なことだと思う	.14	.39	.50	.02	.43
11 メールのやり取りで関わりが深められると思う	.26	.42	.47	−.03	.47
7 相手のメッセージ内容を誤解することがある	−.14	.09	.17	.97	1.00
2 相手にメッセージ内容を誤解されることがある	.20	.05	−.03	.52	.31
寄与率（%）	20.50	15.44	10.95	10.19	

表4　メール利用時における他者との関わり傾向

変数（社会的スキル）	標準偏回帰係数（β）	
	依存的関係性	相互作用性
対人関係スキル：Ⅰ	−	.11
コミュニケーションスキル：Ⅱ	.13†	.13†
トラブル回避スキル：Ⅲ	−.22**	−
問題対処スキル：Ⅳ	−	.13
マネージメントスキル：Ⅴ	.15†	−
対人配慮スキル：Ⅵ	−.13†	−
決定係数	.10	.06
自由度調整済み決定係数	.08	.04
F値	$F(4,163)=4.49$**	$F(3,164)=3.30$*

†：$p<.10$　*：$p<.05$　**：$p<.01$

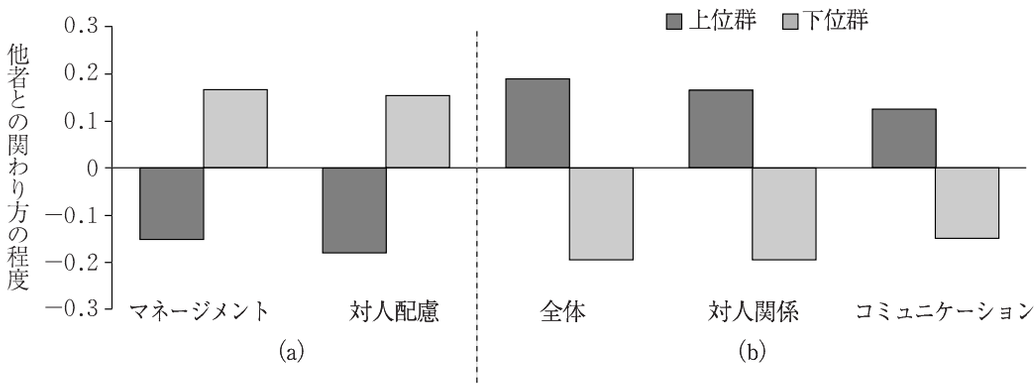

図1　社会的スキル別のメール利用時における他者との関わり方の傾向
(a)依存的関係性　(b)相互作用性

3.3　社会的スキルの違いがSNS利用時における他者との関わり方に及ぼす影響

SNS利用時における他者との関わり方の15項目について，因子分析（最尤法，平行分析の結果に基づき4因子を抽出，バリマックス回転，因子得点の推定）を行った。その結果，第4因子までの累積寄与率は51.26％だった（表5）。各因子の負荷量の高い項目内容を参考とし，第1因子は快適性，第2因子は利己的依存関係性，第3因子は利己的浸透性，第4因子は積極性と命名した。第1因子として抽出された快適性は，直接的な他者との関わり方ではなく，他者との関わりに伴う良好な感情的側面の因子と考えられ，メール利用時の他者との関わり方の快適性と類似した因子と考えられる。

社会的スキルの18項目について合計点（全SS）を独立変数，SNSのコミュニティに属する他者との関わり方の4因子（因子得点）を従属変数として，因子ごとに回帰分析を行った。その結果，利己的依存関係性を従属変数（y_2）としたケースにおいて有意傾向であった（$y_2=-.01x+.74$／$F(1,140)=3.58$，$p<.10$／自由度調整済み決定係数＝.02）。係数が負の値であり，社会的スキルが低いと利己的依存関係性の関わり方が強まる傾向であることが示された。ただし，決定係数は低い値を示した。

社会的スキルの6因子（因子得点）を独立変数，SNSのコミュニティに属する他者との関わり方の4因子（因子得点）を従属変数として変数増減法による重回帰分析を従属変数ごとに行った。その結果，利己的依存関係性，利己的浸透性，積極性の各因子を従属変数とした場合において有意となるモデルを抽出した（表6参照）。利己的依存関係性においては，対人関係スキルが負の係数で有意であり，対人配慮スキルは有意ではなかったものの負の係数を示した。対人関係スキルが高い者は，利己的な依存関係は弱いが，対人関係スキルが低い者は利己的な依存関係が強い傾向であると考えられる。すなわち，対人関係や対人配慮などのスキルが低い者が他者に対して若干過剰な依存的な関わり方をしているのではないかと考えられる。利己的浸透性においては，マネージメントスキルが負の係数で有意傾向であった。マネージメントスキルが高い者は利己的浸透性の関わり方は弱いが，低い者は利己的浸透性の関わり方が強い傾向であると考えられる。コミュニティに属する他者とは，徐々に深く関わる（浸透していく）過程において，上手にコントロールしているのがマネージメントスキルの高い者であり，低い者はその関わり方がやや利己的な傾向になりがちと考えられる。積極性においては，コミュニケーションスキル，問題対処スキルがともに正の係数で有意だった。コミュニケーションスキルだけでなく，SNSのコミュニティの中でさまざまな問題が生じた場合において，適切に対処できるスキルが，積極性に大きく関係していると考えられる。

しかし，メール利用時における他者との関わり方のケースと同様に，関連性や傾向を説明するためにはこれらの決定係数（および自由度調整済み決定係数）はいずれも低い値だった。そこで，全SS，6因子ごとに分類した上位群，下位群の平均値の差の検定をSNS利用時の4タイプの関わり方ごとに行った。あらかじめ等分散性の検定（F検定）により，帰無仮説が棄却されたものについては，ウェルチの法を採用し，それ以外はt検定を行った。分析の結果，快適性については，トラブル回避スキル（Ⅲ）の上位群の方が下位群よりも高い有意傾向であり（$t(134.36)=1.79$，$p<.10$），問題対処スキル（Ⅳ）の上位群の方が下位群よりも有意に快適性が高かった（$t(140)=2.02$，$p<.05$）（図2(a)）。トラブル回避スキル，問題対処スキルの高い者にとっては低い者よりも，SNSコミュニティに属する他者との揉め事をより良く回避，対処でき，より高い快適性を享受していると考えられる。利己的依存関係性においては，対人配慮スキル（Ⅵ）の下位群の方が上位群よりも有意に強いことが示された（$t(140)=2.65$，$p<.05$）（図2(b)）。対人配慮スキルが低い者は高い者よりも他者に対して利己的，依存的な関わり方の傾向が強いと考えられる。積極性においては，コミュニケーションスキル（Ⅱ）の高い者の方が低い者よりも有意に高いことが明

らかとなった（$t(140)=2.07$，$p<.05$）（図２(c)）。重回帰分析の結果においても類似傾向を示した通り，コミュニケーションスキルの高い者は，低い者よりも，SNSのコミュニティに属する他者とより積極的に関わっていると考えら

表５　SNS利用時の他者との関わり方の因子構造

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
3 このコミュニティの参加者は信頼できる	.69	.17	.28	.03	.58
5 このコミュニティは居心地が良い	.69	.36	.20	.28	.73
4 参加者が書いたメッセージを見ることは楽しい	.54	.43	.01	.35	.60
9 うまくコミュニティに参加していると思う	.47	.17	.32	.24	.42
13 参加者が書いたメッセージ内容に寛容だ	.47	.02	.06	−.01	.23
2 参加者に対して不快に思うことがある	−.47	.35	.00	−.12	.36
7 参加者が書いたメッセージに影響されることがある	.00	.72	.03	.08	.53
15 自分の書いたメッセージに共感してほしい	.19	.58	.24	.02	.43
1 このコミュニティでメッセージを発信したい	.27	.54	.29	.35	.56
12 このコミュニティに夢中になっている	.03	.50	.47	.16	.49
8 このコミュニティに関わっていると安心する	.37	.41	.57	.03	.63
14 このコミュニティでもっと参加者と関わりを深めたい	.37	.49	.54	−.15	.69
6 このコミュニティがなくても構わない	−.09	−.17	−.53	−.14	.34
10 傍観者であることが多いように思う	−.13	.06	−.65	−.24	.50
11 このコミュニティでメッセージを書くことは面倒だ	−.15	−.09	−.29	−.70	.60
寄与率（%）	15.58	15.60	13.28	6.80	

表６　SNSのコミュニティにおける他者との関わり傾向

変数（社会的スキル）	標準偏回帰係数（β）		
	利己的依存関係性	利己的浸透性	積極性
対人関係スキル：Ⅰ	−.17*	−	−
コミュニケーションスキル：Ⅱ	−	−	.16*
トラブル回避スキル：Ⅲ	−	−	−
問題対処スキル：Ⅳ	−	−	.19*
マネージメントスキル：Ⅴ	−	−.15†	−
対人配慮スキル：Ⅵ	−.11	−	−
決定係数	.04	.02	.07
自由度調整済み決定係数	.03	.02	.05
F値	$F(2,139)=3.48^{**}$	$F(1,140)=3.38^{\dagger}$	$F(2,139)=5.02^{**}$

†：$p<.10$　*：$p<.05$　**：$p<.01$

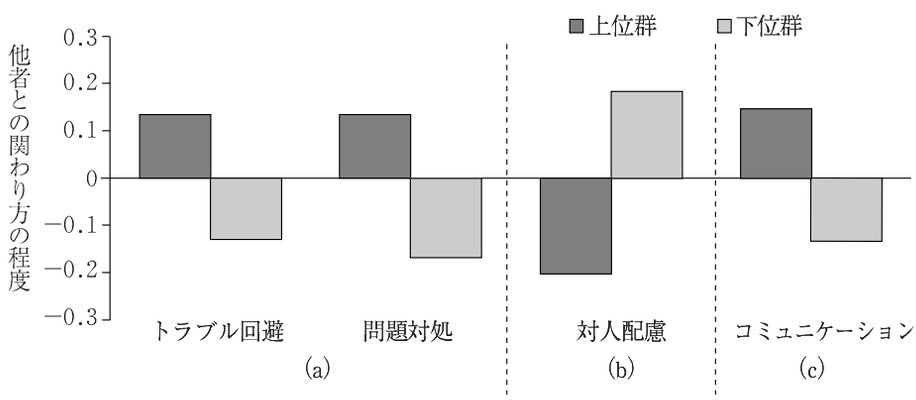

図２　社会的スキル別のSNS利用時における他者との関わり方の傾向
(a)快適性　(b)利己的依存関係性　(c)積極性

れる。

3.4　総合的考察

社会的スキルの違いに着目してネット上の他者との関わり方の傾向を探った。今回対象とした社会的スキルは，対人関係スキル，コミュニケーションスキル，トラブル回避スキル，問題対処スキル，マネージメントスキル，対人配慮スキルの６つの下位概念で構成されていた。その上で，メールおよびSNS利用時における各４タイプの他者との関わり方と社会的スキルとの関連性について回帰分析，重回帰分析，t検定（一部Welchの法）を通して，分析検討した。その結果，社会的スキルの違いが複数の他者との関わり方に影響を及ぼしていることが示された。

メール利用時においては，相互作用性と依存的関係性の２つのタイプの他者との関わり方において，社会的スキルの影響が示された。相互作用性においては，社会的スキル，および下位概念のコミュニケーションスキルの高い者が低い者よりも高い傾向を示したのに対し，依存関係性においては，トラブル回避スキル，マネージメントスキル，対人配慮スキルの低い者が高い者よりも強い傾向を示した。SNS利用時においては，利己的依存関係性，利己的浸透性，積極性，快適性，４タイプすべての他者との関わり方において，社会的スキルの影響が示された。利己的依存関係性においては，社会的スキル，対人関係スキル，対人配慮スキルの低い者が高い者よりも強い傾向を示した。利己的浸透性においては，マネージメントスキルの低い者が高い者よりも強い傾向を示した。積極性については，コミュニケーションスキル，問題対処スキルの高い者が低い者よりも高い傾向を示した。快適性は，トラブル回避スキル，問題対処スキルの高い者の方が低い者よりも高い傾向を示した。

以上の傾向を踏まえると，メール利用時，SNS利用時のそれぞれについて分析したものの，双方には類似性が見られると考えられる。メール利用時の依存的関係性，SNS利用時の利己的依存関係性，利己的浸透性は，いずれも他者へ依存的な関わり方をするケースと捉えることができる。これらは，下位概念を含む社会的スキルの低い者の方が高い者よりも依存的な関わりが強い傾向を示している。一方，メール利用時の相互作用性，SNS利用時の積極性，快適性は，社会的スキルの複数の下位概念においてそのスキルの高い者の方が低い者よりも，他者との円滑で良好な関わり方やそれに伴う肯定的な評価がなされていると考えられる。

石川（2013）は，社会的スキルの高い者の振る舞いを相手との望ましい関わり方のモデルの１つと捉えることで，情報モラル教育の指導において有用な知見が得られることを指摘している。今回の結果においてこの考え方を適用するならば，社会的スキルの高い者の相互作用性，積極性，快適性の関わり方がネット上での他者との望ましい振る舞いである。一方，社会的スキルの低い者の利己的関係性，利己的依存関係性，利己的浸透性の関わり方は改善の余地があると考えられる。社会的スキルの高い者は，低い者に比べて依存的な関わり方が弱い傾向であることを踏まえれば，社会的スキルの低い者は，依存的な関わりをある程度抑えることにより，他者との関わりが改善される可能性がある。SIDEモデルでは，集団規範への同調が生じやすくなるため，仮に強い依存的な関わり方がその集団規範に沿わないものであれば，トラブルの原因になり得る可能性がある。社会的スキルはそうした問題の回避や解決，さらには他者とのより良い関係を構築するために不可欠な役割を果たしていると考えられる。したがって，良好で円滑に他者と関わっていくためには，社会的スキルを高めていくことが必要であると考えられる。

石川・平田（2012）は「つながっていたい」という心情がメールの送信に関わる振る舞いにおいて見られることを示したが，今回得られた他者との関わり方の多くは，この心情が関わっていると考えられる。社会的スキルの高い者に見られた相互作用性，積極性は，他者とのつながりを高めるためには不可欠な振る舞いと考えられる。一方，社会的スキルの低い者に見られた利己的関係性，利己的依存関係性，利己的浸透性は，「つながっていたい」という心情がやや利己的な側面において強調された振る舞いと捉えることができる。

ところで，文部科学省（2013）が示した教員のICT活用指導力の中で，情報モラルなどを指導する能力が他の４つの能力よりも低い傾向である現状を問題解決するためにも，情報モラルがどのような観点から指導できるかをさらに示していく必要があると考えられる。その意味において，今回得られた知見は有用であると考えられる。すなわち，社会的スキルの違いがネット上における他者との関わり方に影響を及ぼす点や，社会的スキルの高い者の方が低い者よりも望ましい振る舞いをしている点は，社会的スキルを高めていくことが情報モラルを指導する上で重要であることを示唆するものと捉えることができる。また，学習指導要領では言語活動の充実を重要視し，思考力・判断力・表現力を育成することを大きな目標としているが，社会的スキルはコミュニケーションスキルが重要な要素の一つであると考えられるため，言語活動を重視する指導は，社会的スキルの育成にも意義があることと考えられる。今回得られた知見を考慮した指導を検討することで，情報教育の枠を越えて，間接的に情報モラルの育成にもつながることが認識されれば，情報モラル教育の指導の在り方も大きく変わっていくと考えられる。

4 おわりに

本研究では，ネット上のコミュニケーション行動や振る舞いについて，社会的スキルの違いに着目し，その傾向を探った。とりわけ，ネット上のコミュニケーションの主流であるメールでの他者とのやり取りと，近年急速に利用が増えているSNS上での他者とのやり取りに焦点を当てた。その結果，メールでの他者との関わり方については，コミュニケーションスキルの高い者の方が低い者よりも良好な相互作用的な関わり方をしている傾向が明らかとなった。一方，トラブル回避スキルの低い者は高い者よりも依存的な関わり方をする傾向が強いことが示された。SNSのコミュニティに属する他者との関わり方については，社会的スキルが低いほど依存的な関わり方をする傾向が強いことが示された。一方，コミュニケーションスキルの高い者は，低い者よりもより積極的な関わり方をしている傾向が示された。さらに，これらの結果を踏まえ，社会的スキルの違いが他者との関わり方に影響を及ぼすことを知ることが，情報モラル教育の指導の在り方に有用であることを考察した。今後ますますネット上のコミュニケーション行動が増え，それに伴い，情報教育や情報モラル教育は今まで以上に重視されると考えられるが，他者と良好で円滑な関わり方の手立てとして，社会的スキルという情報モラルに関連する能力を高めていくことが重要であることが示唆された。

今回は，メール，SNSを独立に分析した。したがって，それぞれの傾向を関連づけ，ネット上での他者との関わり方の傾向を探るには至らなかった。とりわけSNSは多種多様なサービスがあり，それぞれのサービスやツールによる他者との関わり方の違いや共通性を探るために，複数のネット上のサービスを関連づけて分析していく必要があるだろう。また，社会的スキルに着目して，他者との関わり方の傾向を探ったが，ネット上での他者との関わり方においては，さまざまなスキルが求められるだろう。たとえば状況を判断するためには，思考力や判断力が求められるだろうし，集団の中では協調性が求められる可能性もある。今回取り上げなかったスキルの影響についても探る必要があるだろう。さらに，他者との振る舞い方において，社会的スキルの高い者の方が低い者よりも望ましい傾向であることを示したが，実際にネット上でのトラブルや問題発生の頻度，それに対する回避，解決の程度などの客観的な指標は得られていない。したがって，社会的スキルの高い者のネット上の他者との具体的な関わり方については，さらに明らかとしていく必要があるだろう。今回の知見を踏まえて，ネット上での他者との関わり方の傾向をさらに探っていくことが今後の課題である。

文献

石川真（2012）感情表現を伝えるテキストメッセージの特徴に関する研究．上越教育大学研究紀要，31，9-17.
石川真（2013）親密さの違いによるメールコミュニケーションの振る舞いに関する研究．上越教育大学研究紀要，32，25-34.
石川真・平田乃美（2012）親密さの違いによるメールの振る舞い方に関する研究．日本社会心理学会第53回大会発表論文集，159.
菊池章夫（1988）思いやりを科学する，川島書店.
菊池章夫（1993）社会的出会いの心理学，川島書店.
文部科学省（2010）教育の情報化に関する手引き（平成22年10月），開隆堂出版.
文部科学省（2013）平成24年度学校における教育の情報化に関する調査結果（教育のICT活用指導力）.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1339524.htm（検索日2013月９月17日）
総務省（2013a）情報通信白書平成25年版.
http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h25/index.html（検索日2013月９月17日）
総務省（2013b）情報通信統計データベース「通信利用動向調査（平成24年調査）」
http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html（検索日2013月９月17日）
Sproull, L. and Kiesler, S.（1991）Connections: New Ways of Working in the Networked Organization. Cambridge: MIT Press.
Reicher, S. D., Spears, R. and Postmes, T.（1995）A Social Identity Model of Deindividuation Phenomena. European Review of Social Psychology, 6, 161-198.

付記

本研究は，科研費（基盤研究(C)）「青少年のネットワーク環境における社会的なつながりの認識に関する基礎的研究（課題番号23601004）」の助成を受けて行ったものである。

The influence of social skills on the relationship behaviors in the online communications

Makoto ISHIKAWA*

ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the influence of social skills on the relationship behavior in the online communications. Especially, it was focused on the features of the relationship behavior on two major online services, namely e-mail and SNS (Social Networking Service). Six factors were extracted about social skills. It was analyzed what types of the relationship behaviors were influenced by each of the social skills factors.

As a result, the plural type of the relationship behavior was influenced by the various social skills. The relationship behavior by e-mail was found on as follows: A person with high communication skill behaved stronger interactive relationship than a low skill person, and a person with low trouble avoidance skill behaved more dependent on a companion than a person with high skill. The relationship behavior on SNS was found that a person with low social skill behaved more dependent on other people than a person with high skill and a person with communication skill behaved more positive relationship than a low skill person.

* School Education